



教職支援センター ニュースレター

巻頭言

【話し上手になるための鍵は「聴く」ことにある?】

突然ですが、皆さんは「聞く力」「書く力」「読む力」「話す力」の中で自分が最も優れていると思う能力はどれですか?

これは私が大学時代にうけていた講義の中である先生からされた問いです。その先生は講義や講演の際、必ずこの質問をするそうで、だいたいどの場でも「聞く力」に挙手する人が約30%、「書く力」が約20%、「読む力」が約45%、「話す力」は5%いれば多い方というのが実感だとおっしゃっていました。この質問をした後に「もし一つだけ能力がもらえたとしたらどれがほしいか」と聞くと、「聞く力」が約15%、「書く力」が約15%、「読む力」が約5%、「話す力」は約65%で誤差は大抵数パーセント以内に収まるそうです。ここからも多くの人が話すことに苦手意識があることが分かります。

一方で「話し上手は聞き上手」という言葉もあります。

心理学者のトマス・ゴードンは、相手の話への反応を12の型に分類しています。皆さんはコミュニケーションの際、どのパターンで反応することが多いでしょうか。

- ①命令・指示 何かをするように(しないように)言う。
- ②注意・脅迫 あることをすればどんな結果になるかを言う。
- ③訓戒・説教 なにをすべきか、しなければいけないかを言う。
- ④忠告・提案 問題解決の助言、提案をする。
- ⑤講義・論理 事実、情報、論理、自身の意見等で相手の判断に影響を与えようとする。
- ⑥批判・非難 否定的な評価を示す。
- ⑦称賛・同意 肯定的な評価を示す。
- ⑧悪口・ばかにする 相手の価値を下げる。
- ⑨分析・診断 自分の考えで原因を分析したり、解説する。
- ⑩激励・同情 相手の今の気持ちから抜け出させようとする。
- ⑪質問・尋問 原因、動機を知ろうとする。解決のための情報を得ようとする。
- ⑫中止・注意をほかへそらす 問題からそらそうとする、冗談にまぎらわせる。

実は、この12の型は、コミュニケーションを阻害するお決まりの12の型とも言われます。阻害する、と聞いて驚いた方も多いと思いますが、実際に授業でワークをやると、良かれと思って相手にしたアドバイスが逆に相手の抵抗を強めた、相手にモヤモヤが生じる、話をしたくなくなる等の感想がでてきます。この12の型に共通しているのは、すべて相手ではなく自分の思い・考えに基づいた発言・反応であるということです。

家族や友達、仕事仲間、先生と児童生徒や学生とのコミュニケーションの中でもしばしばみられる12パターン。適切なアドバイスができることももちろん大切ですが、まずは相手の話を「聴く」ことをしているかみてみると何か気づきがあるかもしれません。



シリーズ 活躍する卒業生

教職支援センターの前身の教職教育部が発足して10年が経ち、多くの卒業生が教育現場で活躍しています。毎回テーマを決めて、卒業生の活躍を紹介します。

～ vol.10 農学部編 ～



長野県下高井農林高等学校 農業科 教諭

渋谷 美月 先生

農学部食料生産科学科 平成28年度卒業



高校時代に漠然と理科教員になりたいと思い、大好きな植物について学べる農学部へと進学しました。しかし教職課程を取るなかで生物以外の科目に興味を持てず、反対に農業が想像以上に面白く、それに関わる仕事がしたいと考えるようになりました。そんななか農学部教授の「俺は別にお前達を農家にしたいわけじゃない。子ども達に食べ物がどうやって食卓に上るかを教えてやれる大人になってくれればそれでいい」という言葉に感銘を受け、私も子ども達が「そんな大人」になる手助けがしたいと思い、農業科教員を志しました。

周囲の協力もあり、晴れて教員生活がスタートしたものの、普通高校出身の私にとって農業高校は未知の世界でした。「農ク」「農鑑」「総実」当たり間のように飛び交う単語が全く理解できません。先生方はもちろん、生徒達にも大いに助けてもらった1年目でした。

2年目にはクラス担任を持つことになりました。3年間をともに過ごし、進路を決定し、卒業させる生徒達です。始めは不安で仕方ありませんでした。しかし、入学式を終え、生活が軌道に乗ってくると、彼らといるときが一番楽しい時間になりました。未だに気苦労は絶えず、まだクラスを卒業させたことはありませんが、担任を持たなければ教員の醍醐味は味わえないなど新米ながらに思う経験をたくさんさせてもらっています。

私は現在、2年生の担任をしながら野菜に関する科目を担当しています。授業や農業クラブ活動などの研究活動や地域交流を行うなかで、生徒達は予想を超える成長を見せてくれます。引っ込み思案だった子が全校生徒の前で堂々と意見発表を行う、人間関係を上手く作れなかった子が友人たちと笑うようになる。そんな姿を見てきました。

農業高校は、女性職員も増えてきたとはいえ、やはり男性社会です。また、県外の普通高校出身である私は、どうしても常に少数派です。しかし、生徒はもちろん、私自身もワクワクする課題に取り組み、成果が出てくる過程は本当に楽しいです。そうすることで生徒も私自身も成長し、少数派でも、新米でも、少しずつではありますが、認めてもらえることが増えてきているように感じます。教員はとて大変な仕事だと思います。しかし、ごくたまに、その大変さを超えると一っもすてきな瞬間にも出会える、なぜかやめられない仕事です。





長野県飯田市立緑ヶ丘中学校 理科 教諭

鈴木 綾子 先生

農学部応用生命科学科 平成29年度卒業

信州大学を卒業し、中学校の教員として採用されてから、1年半が経ちました。現在私は飯田市立緑ヶ丘中学校で2年生の担任と水泳部の顧問をしています。今年は初めて担任をもち、先輩の先生方に支えられながら、理科の授業や日常生活、部活動といろいろな角度で子どもたちと関わる中で、一人ひとりが少しずつ大人になっていく過程を見ることができ、大変ですが非常に楽しい日々を送っています。

私が担任をさせていただくにあたり、大切にしていることがあります。それは「何事にも一生懸命取り組む」ことです。当たり前のことですが、学級では時間はきちんと守る、掃除の時は誰よりもていねいに床を磨くこと、給食当番を生徒に混じってやることなど、生徒のやるべきことを自分も一緒になってやるように心がけています。副担任の先生方に「給食の配膳、上手になったね」「先生が出張でいなくても、きちんと1日生活できたよ」と言われた時には、本当に嬉しいです。水泳部は全く経験がなかったので、本や動画で勉強し、スイミングクラブのコーチや他校の顧問の先生方にアドバイスを頂きました。生徒も精一杯努力し、北信越大会まで進むことができました。

農学部では、研究活動を行う時、「協調性」をモットーに、仲間と協力しながら自分のできることに精一杯取り組むことが大切だと考えていました。また、教員採用試験に向けての勉強の際、「チーム学校」というキーワードを学びました。学校組織全体が一つとなって生徒指導や教育活動に取り組むというものです。

私は最初、クラスの担任や部活動の顧問は一人で担うものだから、「協調性」や「チーム学校」は実際には関係ないのだろうと考えていました。

しかし、学校現場に入ってから、その認識は全く違うことを学びました。同じ教科の先生方とは10分休みのたびに授業の話をし、学年の先生方にも日々の学級経営について相談に乗っていただいています。

他の先生方もいつでも子どものためにご尽力くださいます。緑ヶ丘中学校は各学年6～7クラスある大規模校で、生徒数は約680人、職員数は60人もいます。たくさんの方に囲まれている今だからこそ、分からないことをどんどん尋ね、子どもたちや先輩の先生方から積極的に学んでいきたいです。

また、生徒にも多くの人と仕事や課題を成し遂げる喜びや楽しさを味わってもらえるよう、授業や生徒会、部活動に取り組みたいです。



教職支援センター8～10月の動き

- 長野県総合教育センター「チャレンジのめ塾」(8/18)、○長野県総合教育センター連携講座(「教職論」(8/19～20)、「障害と共生社会」(8/26～27)、「進路指導・キャリア教育の理論と実践」(8/29～30)、「教育の思想と歴史」(9/2～3)、「学校教育と情報」(9/2～3)、「教育課程の編成法」(9/24～25))、○山形村通学合宿(8/26～28)、○教職教育委員会学芸員養成課程実施部会(9/11)、○第2回教職事務担当者勉強会(9/17)、○松本市「子どもプレイパーク」(9/22～23)、○教職支援センター拡大打ち合わせ会議(10/1)、○長野県総合教育センターと教職実践演習との協働でカリキュラム研修講座(10/3,4)、○教員免許更新支援センター会議(10/7)、○教職実践演習授業参観上田地区(9/5)、伊那地区(10/9)、松本地区(9/6, 10/4)、※長野地区水害のため中止、○教員免許更新支援センター会議(10/31)

理数系学部初級CST養成講座について

今回は「CST」の活動を紹介します。

理数系学部で教職を目指す学生諸君が将来のCSTを目指して熱心に取り組んでいる様子や意義をお伝えしようと思うのですが、まずCSTをご存じない方も多いと思いますので、最初にこのことを説明します。

CSTとは「高度な専門性と豊かな実践力を兼ね備えた理科教育を推進する上で中核的な役割を担う教員」のことで、Core Science Teacherの略です。学校現場で地域の理数系教育の中核となって、研修会を立案・運営したり講師として活躍したりする、いわば理数系教育のリーダー的役割を果たすことのできる教員のことで、このCSTに認定されるためには、まず大学で初級プログラムを、その後教育現場で上級プログラムを修了する必要があります。信州大学では、長野県教育委員会との連携の基に信州大学CST(SCST)プログラムを、教育学部と理数系学部の2本立てで構築しています。

具体的な活動例を右表に記しましたが、これらは全て日課の空き時間や休業日等に行われます。例えば通年講座では、小中高での理数系科目の既習内容を、指導者の目線で学び直し、また不得意分野の補完に努める学習を、実験実習を中心に重ねています。山形村通学学舎は小学生と寝食を共

にし、また科学教室のチューターを経験することで子どもの理解を深め、また指導者としての自分を発見してもらうのがねらいの企画です。参加学生からは「子どもに教えることは難しいけど楽しい」といった声をよく耳にします。CST担当としては、学生にまずは“子ども達と共に学ぶ”ということの充実感を、また理数系科目を学問として学ぶ楽しさを実感してもらいたいと願ってプログラムを構築しているところです。これらプログラムの実践に当たっては、学内の教職員の方々をはじめ、学校現場の先生方、教員委員会や地域の方々の協力を得て成り立っています。関係の方々はこの紙面を借りて感謝申し上げるとともに、このご恩に報いるためにも1人でも多くの学生がこのプログラムに積極的に取り組み、将来、学校現場での理数系教育の充実に貢献できる人材として巣立っていくことを切望しています。

- ✓ 通年講座 週1コマ
- ✓ 各学部における通年講座
- ✓ 教員免許更新講座聴講
- ✓ 長野県高等学校科学協会講演会
- ✓ 学校現場の臨床学習・学習支援
- ✓ 山形村通学学舎学習支援
- ✓ 高校生課題研究発表会傍聴など
- ✓ 地域の科学教室チューター体験



(CST担当特任教授 桜井達雄)

編集後記

今回も、新任の栞先生の巻頭言、農学部卒業生の先生方からの実践報告、桜井先生からのCST報告…と、盛りだくさんの内容になりました。昨今「ブラック」と形容されることの多くなった教職ですが、卒業生の先生達からの報告には、その言葉の陰で見落とされかねない楽しさ、やりがいも溢れています。ぜひ、多くの方に目を通していただけることを願っています。(広報担当 河野桃子)

